



Merry Christmas

©clak

クリスマスと植物の関わり色々

樹木（モミ・ヒイラギ・ヤドリギ）&花（ポインセチア）

投稿者：宮井 正彦

今年も12月に入ると早くもクリスマス商戦が始まった。「クリスマスの行事」は、キリスト教信者の少ない日本にもしっかりと定着している。デパートやお店には、早くも大きなクリスマスツリーが飾られ、繁華街には夕暮れから多色のLEDのイルミネーションがチカチカ光り輝き、クリスマスソングも流れ始めた。

クリスマスの起源

古代ローマでは、厳しい自然の中で生き生きと育つ巨樹を「強い生命のシンボル」として崇拝された冬至の祭りが催されていた。12月25日（冬至）は「不滅の太陽が生まれる日」とした「太陽神ミトラを祝う冬至の祭」であり、自然信仰の祭りであった。その祭りをキリスト教の布教に利用し、キリスト教的な意味合いを取り入れたのが「クリスマス」の祭りの起源だとされる。12月25日をキリスト誕生の祝いの日とし「モミ等（常緑針葉樹）のクリスマスツリー」や「サンタクロース伝説」、及び「クリスマスカラー（緑・赤・白・金）」もセットされ、更には「クリスマスキャロル」、「クリスマスソング」と繋がり、大衆の中に溶け込んだ行事になった。クリスマスツリーに飾りつけやイルミネーションを施す風習は19世紀以降にUSAで始まった。商業ベースのクリスマスの始まりでもある。クリスマス商戦は、株価を左右するとも云われている。但し、極めて宗教的な重要な行事であることには変わりはない。日本でクリスマスが行事化したのは昭和30年代以降である。

クリスマスについてあれこれ

ところで、「クリスマス（英: Christmas；キリストのミサの意味）」と呼称するのは、英国とアメリカとカナダ・オーストラリア等旧英国領および日本&東南アジアの一部で、北欧は「ユール（冬至祭）」イタリア「ナターレ」（降誕祭）」フランス「ノエル（降誕祭）」ドイツ

「ヴァイナハトゥン（聖夜）」オランダ「ケルストゥミス（キリストのミサ）」と呼称は各国様々である。クリスマスと呼ぶ国は意外と少ないのである。

「クリスマス」は、あくまでもキリストの誕生（降誕）を祝う祭り（誕生日は定まってもいない。）キリスト教で最も重要な祭と位置づけられるのは復活祭（十字架にかけられて死んだイエス・キリストが三日目に復活したことを記念・記憶する祭り）である。教会暦では、日没を一日の境目としているので、クリスマスは「12月24日の日没から12月25日の日没まで」なんだそうである。

クリスマスと植物

1. クリスマスのシンボルツリーは「モミやトウヒ等の常緑針葉樹」

・起源と逸話

クリスマスツリーは、厳しい冬を乗り切るための強い生命力のシンボルとして巨樹を崇めた自然崇拝信仰が起源である。キリスト教布教において①旧約聖書の創世記に登場するエデンの楽園の「知恵の木」の代替として、②ヨーロッパに分布する常緑針葉樹（がモミ、トウヒ）の円錐形で枝を輪生に出す立姿（幹を着けた三角錐の形状）がキリスト教の「三位一体（神と子と聖霊）」の教えの象徴とし、③常緑針葉樹の冬でも緑であることが「永遠の命」の象徴に見立て意味合いを取り込んだものである。従前の巨樹の「榎の木」信仰から「モミやトウヒの木」に14世紀ドイツですり替えられて現在に至っていると云われる。日本ではドイツのクリスマスキャロルの「樅の木」（ドイツ語：O Tannenbaum）の影響で「モミ」が定着しているが、ヨーロッパではドイツトウヒ（ヨーロッパトウヒ）が一般的にはツリーに使われている。米国では「モミ（オレゴンモミ等）」が使われている。最近では、ヒノキ科イトスギ属のコファニー（ゴールドクレスト等）」もツリーに使われる。クリスマスツリーはクリスマスのシンボルなのである。

・ツリーに使われる樹木の生態と特長

針葉樹が中心となる森林が多く見られるのは、広葉樹の生育には適さない寒冷地や乾燥地あるいは湿地等劣悪な極地環境である。既に絶滅し現存しない裸子植物の祖先から1億4000万年前（ジュラ紀）（注：もっと昔の2億5千万年前（三畳紀）に分化したとする説もある）に分岐した被子植物に凌駕された裸子植物は劣悪な環境へ追いやられ、被子植物25万種に対し裸子植物は750種前後となっている。裸子植物のうち球果類（針葉樹）が約450~500種である。仮道管による凍結蒸散防止機能や球果による種子保護、鱗片葉・線形葉・披針葉等による形態的耐性機能の確保により悪環境下での耐性を発達させたのであろう。球果類のうち最も種の分化が進んだ「マツ科」は11属約230~250種を占め

ている。マツ科のうち、特に「モミ属(約40種類)」と「エゾマツトウヒ属(約30種類)」は、厳しい北半球の中緯度以上の冷温帯や亜寒帯地域で大規模な森林帯を形成している。タイガ：ロシア語 taiga (ユーラシア大陸・北アメリカ大陸の北部の亜寒帯に発達する針葉樹林帯) は、その代表例でモミ属・トウヒ属を中心に構成された森林帯である。厳しい環境の中、生き生きと常緑を保ち、輪生上向きの枝を張り、円錐状に育つ常緑針葉樹のモミやトウヒの立姿は、厳しい冬に生活する人々にとって「永遠の命」の象徴とされたのは頷ける。

日本は、山岳地帯の亜高山帯針葉樹林。ブナ帯より上の高山帯までの範囲がこれに当たる。標高で見れば、本州中南部地域ではおよそ1500m以上がほぼこれに当たる。北海道中部以北では平地までこの型の森林帯にはいる。但し、人の手によって植栽された樹林帯が多く、本来の針葉樹林であるかは不明である。因みに、日本における常緑針葉樹の葉の寿命は2~10年。一斉に落葉するのではなく、長年かけて落葉する。(参考；日本の常緑広葉樹の葉の寿命：アラカシ・クスノキで平均2~2年半程度 ツブラジイで2~4年半程度との調査例がある。常緑針葉樹よりはるかに短い)。

世界で最も寿命の長い葉は米国産のマツ属「イガゴヨウ」(学名 *Pinus aristata*, 英名 Bristlecone pine 樹齢記録4,950年がある。)の33年と云う。

○モミ属；「モミ」「ウラジロモミ」「シラビソ」「オオシラビソ」「トドマツ」

モミ属(学名：*Abies*)は、北半球の寒冷地から温帯にかけて約40種が分布する。

モミ属はトウヒ属やマツ属に比べて分布は狭い

一般的には平滑な樹皮で皮目状の横筋模様の「ヤニ袋」を持つ。

枝はマツ属(やヒマラヤスギ属と違い長枝と短枝の区別はなく葉は長枝のみに付く。何れも常緑である。トウヒ属と違い葉の付く部分の枝の「葉枕」は発達しない

球果は上向きに着き、熟するとヒマラヤスギ属と同様に、樹上で種鱗片が分解し種子を散布する。

モミ属の木材の性質はトウヒ属と同様に材は白みがかっており、辺材と心材の区別がつきにくい「無色心材」である。材としては脆く腐朽しやすい。

①「モミ」学名：*Abies firma*

モミの和名は風に「揉む」を語源とする説と神聖の木で「臣木(おみのき)」が語源だとする説がある。日本に自生するモミ属で「最も温暖地に分布」する。照葉樹林帯ではツガなどと混成する。尚、分布地が暖帯と温帯の間に位置することから「中間温帯指標植物」と呼ばれることがある。森林を構成する種の組成は「照葉樹林」である。モミ属の中では「最も葉が固い」こと、葉は「らせん状」に着くこと、若樹の葉先は「二叉に鋭く尖る」こと、樹皮色がモミ属は一般的に白灰色だが「灰茶色である」こと、球果は茶色で「種鱗より苞鱗が長い」こと等の特長がある。また、冬芽は茶褐色の芽鱗に包まれる。長野県の諏訪大社の「御柱祭りの神木」としても有名である。樹齢150年超えの巨木である。



葉裏の気孔帯は余り白くならない 球果は上向き苞鱗が種鱗より長く飛び出る

② 「ウラジロモミ」裏白樅) 学名： *Abies homolepis*

モミよりも寒冷的な気候を好み、福島県から四国までの温帯北部（落葉広葉樹林帯）から亜高山帯下部に分布する。本州中部では、おおよそ高度 1000m でモミと入れ替わり、1700-800m ではシラビソと入れ替わる。葉の裏側の気孔帯が幅広く鮮白のためこの名が付いたと云う。モミに似るが、葉の着き方は平行状である。葉先はモミほど鋭く 2 裂はしないが窪む。上向きに着く紫色の球果はモミよりやや小さく苞鱗は種鱗から飛び出さない。冬芽は蠟物質に覆われている。



葉裏の気孔帯が白い 球果は上向きに着く 苞鱗が種鱗より短い

③ 「シラビソ」、学名： *Abies veitchii*) と「オオシラビソ」学名： *Abies mariesii*

「シラビソ」；別名「シラベ」 「オオシラビソ」；別名「アオモリトドマツ」

いずれも「日本固有種」である。漢字で「白檜曽」 「大白檜曽」

ウラジロモミより更に上部、海拔 1,500～2,500m の亜高山帯に分布する。長野県の麦草峠（日本で最も海拔の高い峠）ではシラビソとオオシラビソと混生している。基本的分布は、太平洋側の雪の少ない山岳ではシラビソ、日本海側の多雪地ではオオシラビソである。

シラビソの葉は軸の両側に並んで生じ葉の軸がよく見える。球果の先端がやや尖り 4～6 cm と小さい。混生地ではオオシラビソと比較するとオオシラビソの葉はやや短い枝に密生するため小枝の軸が見えないこと、樹冠の先端枝が十字架状に伸びに目立つこと、球果の先端も丸みを帯び 10 cm とやや大きいことで区別できる。

シラビソの近縁種に北海道に分布する「トドマツ (*Abies sachalinensis*)」がある。学名はロシアのサファリンに因む。最終氷期あるいはそれ以前の氷期に本州まで南下したトドマツが、氷期の終わりとともに隔離されて分化した集団が「シラビソ」と考えられている。



「シラビソ」球果は上向きに着く 球果の先端が尖る 苞鱗が長い

○トウヒ属；「トウヒ」「エゾマツ」「ドイツトウヒ」「コロラドトウヒ」

トウヒ属が北米起源である。北半球の温帯から亜寒帯にかけて広い範囲に 30 種以上が分布する。分布の北限はシベリア・アラスカ・カナダの北極圏、南限はユーラシアではビルマとヒマラヤ、北米ではメキシコ北部の高山地帯に達する。タイガや中緯度山岳地帯の亜高山帯における重要樹種である。日本では、北海道と本州中部山岳地帯の山地帯上部から亜高山帯を中心に分布。

樹皮は茶色で鱗状に割ける。葉の先端は尖る。枝に「葉沈」がある。葉の断面は横に扁平する種類（トウヒ節トウヒ；トウヒ・エゾマツ・コロラドトウヒ等）と菱形になる種類（バラモミ節とオモリカトウヒ節；ドイツトウヒ・ヤツガタケトウヒ等）とがある。

球果は枝の先端に下に垂れて着果する。苞鱗片は極小である。マツ属のように種鱗片を

開閉させるだけで種子を散布し散布後も球果は残る。

材の良質なものはピアノ、ギター、ヴァイオリンなどの楽器に使われる。

- ① 「トウヒ」(唐檜、学名：*Picea jezoensis* var. *hondoensis*) と「エゾマツ」(蝦夷松、学名：*Picea jezoensis*)

トウヒはシラビソと同様に海拔 1,500～2,500m にかけての亜高山帯に分布するが積雪に弱く生育範囲は狭い。トウヒはエゾマツの変種として扱われるが、現在の DNA 解析によれば「チョウセントウヒとの関係が近く、氷期にエゾマツが南下した際、大陸でチョウセントウヒに変異したものが朝鮮半島経由で本州に入り変異したのが「トウヒ」の起源と考えられている。三重県の大台ヶ原にも分布する。モミ属に比べ寿命は長い。どちらも葉先は尖り断面は横に扁平で裏側に気孔帯がある。一般的にはエゾマツよりも葉が短く、球果が小さいのがトウヒとされる。



葉枕（突き出た部分が葉柄の様に見える） 枝先の球果は垂れ苞鱗は発達せず小さい

- ② 「ドイツトウヒ」学名：*Picea abies* 英語名 Norway Spruce 別名オウシュウトウヒ、ヨーロッパトウヒ。

学名の種名が *abies* であり、モミ属の属名と同じで実に紛らわしい学名である。

ヨーロッパトウヒは、断面が 4 角形で各面に気孔条がある。球果は長楕円形で大型 (15cm ほど) であり枝先に下垂して着く。原産地は欧州 (北はスカジナビア半島、南はバルカン半島、東はウラルから西シベリア) で 広く分布するが、ドイツでは原産地としての分布は地域に限られる。しかし、幅広い環境適応性と早い成長を持つ性質から全土に大量に植林され、ドイツの林業の中心樹木となり「パンの木 (Brotbaum 生計の糧の木)」と呼ばれている。日本にも「ホワイトウッド」と言う名前で多量に輸入されている。北海道にも一部植栽されており、公園樹にもなっている。

2008 年にスウェーデンで発見されたドイツトウヒの樹齢は約 9,550 年と云われ、現在の世界最高樹齢樹となっている。

葉の断面4角形の日本産のトウヒには八ヶ岳だけに産する「ヤツガタケトウヒ」がある。



葉先が尖り断面は四角形 球果は長楕円形で大型（15cm ほど）；Wikipedia より

③ 「コロラドトウヒ（プーゲントウヒ）」学名 *Picea pungens*

原産地はアメリカのロッキー山脈。葉の断面は扁平で裏側に気孔帯がある。長さ 3cm 程度の針状でその表面には青白い粉上のワックスがかかっている。

最も美しいクリスマスツリーといわれる。中で最も銀白色が強くて人気の高いのが、園芸種のホプシー（Hoopsii）と云われる。



葉はトウヒ同様扁平で先は尖る 銀白色粉状ノワックスで雪のようで綺麗。

○園芸種コニファー「ゴールドクレスト」

「コニファー」（英語: conifer）は球果植物（針葉樹全体）さす園芸用語。

「ゴールドクレスト」学名；*Cupressus macrocarpa* の園芸種 Gold Crest ヒノキ科イトスギ属モントレイトスギの園芸種ゴールドクレストである。

明るい黄緑色の葉と整った樹形が好まれ、比較的安価なこともあり、手軽なクリスマスツリーとして最近人気がある。



西洋サイプレス（イトスギ）らしい優しさ ツリー飾りのゴールドクレスト¥980 也

2. クリスマスと「セイヨウヒイラギ」

・起源と逸話

「セイヨウヒイラギ」は常緑で真冬に目立つ赤い実をつけることから、古代ローマ時代から農神祭の聖木とされていたが、キリスト教布教において、キリストの足元から初めて生えた植物とされ、棘の葉や赤い実をキリストの流した血と苦悩のシンボルとして「キリストの刺」「聖なる木」となった。また、「セイヨウヒイラギ」には魔力があると信じられていて、キリスト教もそのことが取り入れた。「クリスマスホーリー」としてクリスマスには欠かせない飾り付けである。

・樹木の生態と特長

「セイヨウヒイラギ」(学名：*Ilex aquifolium* 英語；European holly、English holly 別名セイヨウヒイラギモチ) モチノキ科モチノキ属の園芸種。原産地はヨーロッパ西部・南部、アフリカ北西部、アジア南西部。本来のクリスマスホーリーである。ゴルフのマスターズが開催されるオーガスタ・ナショナルクラブの18番ホールには「ホーリー(Holly)」の愛称がある「セイヨウヒイラギ」の有名ホールである。

近似種に「シナヒイラギ」(学名 *Ilex cornuta*。別名「ヤバネヒイラギ」、「ヒイラギモチ」)がある。中国東北部、朝鮮南部が原産地である。「チャイニーズホーリー」「クリスマスホーリー」の流通名で売られている。「ヤバネヒイラギ」とも云う通り葉が楕円形のセイ

ヨウヒイラギに比べ、四角形に近く、より厳しい棘を持つ葉形である。

その他、クリスマスシーズンにセイヨウヒイラギの代替として販売されるものとして「アマミヒメヒイラギモチ」(学名; *Ilex dimorphophylla* Koidz. 別名アマミヒイラギ、ヒメヒイラギ)モチノキ科モチノキ属)がある。奄美大島特産絶滅危惧種 IA 類である。姫と着くだけに小型だが葉縁の棘は鋭く尖る。

クリスマスの時期に赤い実を着けるモチノキ科モチノキ属の樹木には「モチノキ」「タラヨウ」「ナナミノキ」等がある。

いずれも雌雄異株で、葉は互生、核果は赤いものが比較的多い。

英語のホーリー (holly) とはモチノキ属総称の言葉だが映画で有名なハリウッドの森 holly-wood はモチノキ科とは関係ないバラ科の植物である。



「セイヨウヒイラギ」(; Wikipedia より)

「シナヒイラギ」



「アマミヒメヒイラギモチ」

「モチノキ」

「タラヨウ」

「ア

「セイヨウヒイラギ」には魔除けの力があると云われるが、同様に日本でも正月に魔除けに使われる「ヒイラギ」(学名: *Osmanthus heterophyllus*) もまた、全く異なるモクセイ科モクセイ属の植物である。葉は対生し楕円形から卵状長楕円形の縁には刺となった鋭鋸齒がある。老樹になると葉の刺は次第に少なくなり、縁は丸くなるのはセイヨウヒイラギに似る。種小名 *heterophyllus* は「異なる葉」を意味し、この性質に由来するという。雌雄異株で11月から12月上旬にかけ白い花を着ける。良い香りの花である。黒い実を着ける。原産地は日本と台湾。仲間には「ギンモクセイ」その変種の「キンモクセイ」「ヒイラギモクセイ」等がある。

「ヒイラギモクセイ」



「ヒイラギ」葉は対生 香の良い白い花盛り (11/)



「ギンモクセイ」

3. クリスマスと「ヤドリギ」

・起源と逸話

「ヤドリギ」は落葉樹に取り付き宿主の落葉跡の真冬でも常緑で白い実をつける神秘的で生命力あふれる姿から、ヨーロッパ先住民族ケルト人は、「再生や永遠の命のシンボル」として崇拝して冬至祭を執り行われていたそうである。キリスト教においてもヤドリギには神秘的な力と魔除けの力があるとされ、多くのヨーロッパ諸国ではクリスマスにヤドリギを玄関や部屋の入口につるす習慣があるそうだ。その下を通ることで不死の力を得ると云われ、その下でキスをすると永遠に結ばれるという言い伝えもある。また、クリスマスにヤドリギの白い実をもぎ取ると誰とでもキスができる権利が与えられる(誰とでも結ばれることが出来る)との言い伝えもある。

尚、ヤドリギはクリスマスイブの誕生花でもあり花言葉は「克服」「忍耐」「キスさせて」だそうだ。

・樹木の生態と特長について

「ヤドリギ」(*Viscum album subsp. coloratum*) は「セイヨウヤドリギ」の亜種。

新エングラー、クロンキスト分類体系ではヤドリギ科であったが、A P G III分類体系では「ビャクダン科」「ヤドリギ属」に組み入れられた。雌雄異株である。亜種は寄生する「宿主の違い」や「果実や葉の形態の違い」から4～6種の亜種に分かれている。

- ① 「セイヨウヤドリギ」：ヨーロッパ、南西アジアからネパールにかけて分布。果実は白、葉は対生。葉身は長さ3-5 cm。

宿主樹木；バラ科リンゴ属、ヤナギ科ハコヤナギ属ポプラ、アオキ科シナノキ属、まれにブナ科コナラ属の樹木に寄生する。

- ② 「ヤドリギ」；日本および朝鮮半島、中国に分布。花期は2～3月。果実（液果）は10～12月に淡黄色に熟す。葉は対生。葉身は長さ2-8 cm。

まれに橙黄色になる「アカミヤドリギ」(*f. rubro-aurantiacum*) がある。

宿主樹木；アサ科（旧ニレ科）エノキ・ブナ科クリ属クリ・カバノキ科クマシデ属アカシデ・ヤナギ科ヤナギ属・ブナ科ブナ属ブナ・コナラ属ミズナラ・クワ科クワ属クワ・バラ科スモモ属サクラなど幅広い。しかし、セイヨウヤドリギよりは多くない。

種子を包む粘液質の果肉は鳥の消化管では消化されず排泄され、その粘着力により宿主樹の枝等に粘着する。そこで発芽して宿主の樹皮に向けて寄生根を下ろす。寄生のはじまりである。寄生根は宿主から水と無機の栄養を得るための特殊な根である。樹皮に吸着するために吸器をつくりそこから不定根を樹皮下に延ばし宿主の形成層に達すると寄生根はしっかり木部と結合させる。この時、吸器から木部細胞増殖促進物質を出しているそうだ。半寄生のヤドリギは宿主から水分や必要な栄養を盗み取っている一方、光合成は十分に行っている。さいたま市の公園には冬になると、エノキのヤドリギにキレンジャク・ヒレンジャクが飛来してくるスポットがある。ところで、毒と謂われているが、熟れたヤドリギの液果を舐めてみたことがある。粘着物質は戴けるものではないが、昔のサッカリンの様な異様な甘さだった。



「エノキ」と「ヤドリギ」

ヤドリギの熟した淡黄色の液果

4. 「クリスマスカラー」を代表する植物「ポインセチア」

・クリスマスカラーとは

緑：常緑樹が常に緑を絶やさないことから、永遠の命を表している。

赤：イエス・キリストが十字架上で流した血を表し、神の愛の象徴である。

白：雪の色であるとともに、純潔さや清められた魂を表す。

金：高貴さや、キリストの降誕を知らせた「ベツレヘムの星」を表す。クリスマスツリー
のてっぺんに飾る「ゴールドেনスター」はまさにこの星である。

クリスマスツリー、クリスマスリース等のオーナメントやクリスマスフラワーには宗教
的カラーの意味が込められている。

・クリスマスフラワー「ポインセチア」の起源と逸話

濃い「**緑**の葉」、鮮やかな「**赤**の苞葉」樹液の「**白**」、花と赤い苞葉の形が「**ベツレヘムの星**」を連想させクリスマスカラーが備わっていることに併せ、花言葉が「**聖夜**」であり、「**クリスマスフラワー**」とも呼ばれる。原産国メキシコでは「**ノーチェ・ブエナ**（聖夜）」と呼ばれていた。19世紀の初めにアメリカの初代のメキシコ公使J・R・ポインセット（政治家；医師・植物学者もある）がアメリカに持ち帰ったことからその名前に因み、英名 poinsettia の名前がつけられたと云う。日本には19世紀の後半の明治時代に入って来た。和名は真っ赤な架空の動物「猩々」に因み「猩々木（ショウジョウボク）」とつけられた低木である。クリスマスとの関係の歴史は新しい。

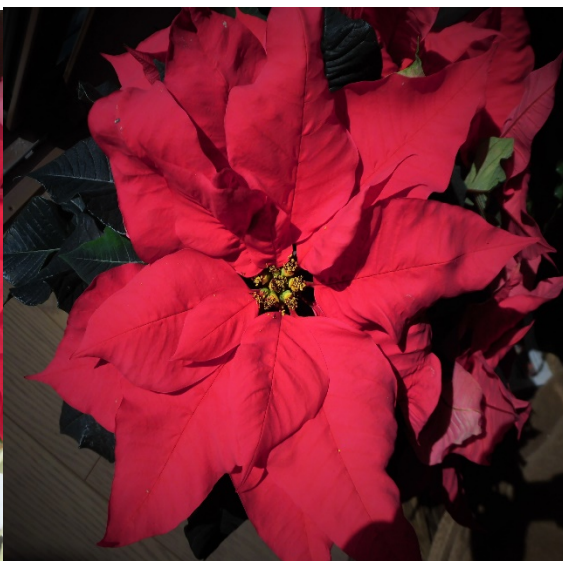
・生態と特長—ポインセチア（ショウジョウボク）とショウジョウソウ

- ① 「**ポインセチア**」（英名 poinsettia、学名 *Euphorbia pulcherrima* 和名；猩々木 ショウジョウボク）トウダイグサ科トウダイグサ属のメキシコと中央アメリカ原産の樹高3mになる常緑性低木である。花の特徴は、花卉や顎は退化して痕跡しかないが、花軸と苞は変形して杯状にになった「杯状花序」である。雄花雌花はほとんど単独の雄蕊・雌蕊まで退化しており、挿し木栽培（クローン）のためか、園芸店で売られているポインセチアは「雄花だけの株」を見ることが多い。「雌花単独の株」や「雄花と雌花を持った両性の株」が稀にあるようだが、両性花の場合雌性先熟で自家受粉を避ける仕組みになっている。トウダイグサ類特有の腺体は雄花に1個（ときには2個）セットされており、長楕円形で真ん中に溝があり、受粉期には豊富な蜜を湛えて昆虫を誘っている。杯状花序の下に着くキリストの血の色に例えられる赤く染まる葉の形の苞葉がポインセチアの鑑賞の対象である。その赤はアントシアニンとカロチノイドと葉緑素のバランス調整によるもので、クリスマスに併せ、10月頃から12時間以上の短日処理と15度以下の温度調整により花芽形成と苞葉の赤色化が促されている。現在、改良により多様な色（黄色・ピンク・白等）や斑入り等の品種が誕生しており、時には根から染料を吸収させた青い苞葉のポインセチアまで見ることが出来る。ポインセチアは傷つける

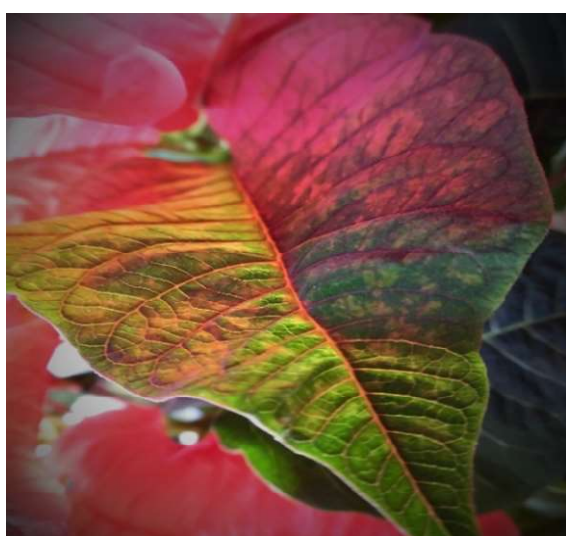
と全身どこからも「白乳」を出す。これには有毒成分「フォルボール」が含まれており、皮膚炎・水疱などの症状を引き起こすほか、発がん性を促す危険も問われている。



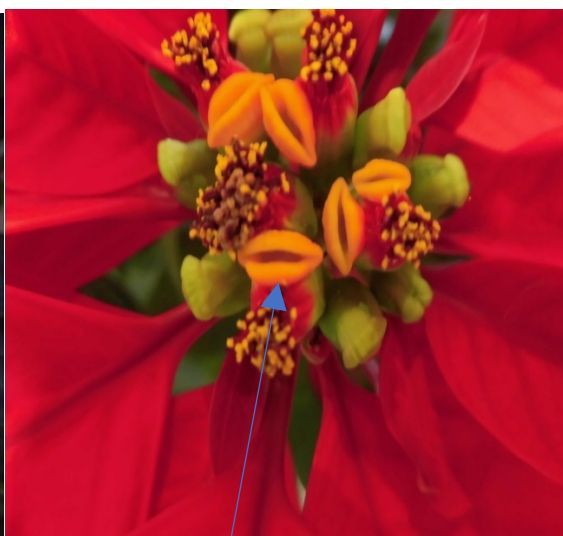
色々な品種の「ポインセチア」



「ベツレヘムの星」の中心は雄蕊ばかり



短日処理での赤品種の苞葉の着色変化の過程

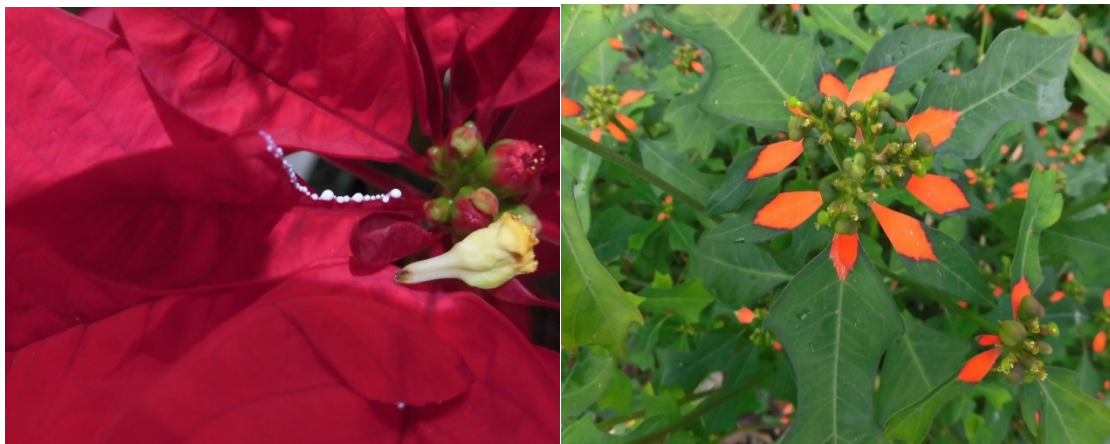


杯状花序と腺体（腺体の割目から蜜

② 「ショウジョウソウ」(学名 *Euphorbia cyathophora* 和名；猩猩草ショウジョウソウ)
トウダイグサ科トウダイグサ属の一年草である。ポインセチアの木本に対する草本版の
対比植物である。蒴果により種子繁殖する。

原産地アメリカ合衆国中部～アルゼンチンでは多年草である。苞葉の付け根は鮮やかな赤ではあるが緑を残す。雌雄異花で、1雄花1雌花がセットされた杯状構造である。壺型の王冠のような総苞に雄蕊と腺体（1～2個）がつき、その先が雌花である。球形の子房（3室）には3本の花柱があり柱頭の先は深く2つに裂けた雌蕊がある。雌花が先に他花受精すると子房が大きく膨らみ垂れ下がる。その後雄花が成熟して花粉を出

す。「雌性先熟」である。ポインセチア同様の白乳を出す毒草である。



ポインセチアの傷口からの白い乳液 「ショウジョウソウ」 雌性先熟の杯状花序

5. おまけ「サンタクロース伝説」

サンタクロースとその風習（子供へのプレゼント）は、4世紀頃、ミラ（現トルコ）のキリスト司祭の聖人ニコラウスの伝説がもとになったと云われる。その聖ニコラウス司教が儀式で着た服が赤い色だった（？）ことから、カソリックの教会では聖人（殉教者）の為の祝日には「赤い司祭服を着用するになっている」とのことである。過去（あるいは現代の一部）には黒い服、緑の服、紫の服もあった（ある）らしい。因みにサンタクロース（セイントニコラウス）の白いトリミングのある赤色の衣装は、「グリーンランド国際サンタクロース協会」の世界公認サンタの衣装ということである。

セント・ニコラウスは、オランダ語で「Sante Klaas」この英語読みで「Santa Claus（サンタクロース）」になったという。1898年、日本で紹介された名は「三太九郎」だったと云う。子供たちは、実は親が用意したプレゼントであることを承知しながらサンタさんからのプレゼントのふりをして巧みに親にたかる術は今も昔も変わらない。子供は大人が思うより遥かに強かなのである。



今年も残り僅か ご苦勞様でした。良いお年をお迎え下さい

終わり